

ガウリコ『彫刻論』翻訳完成と出版

大阪芸術大学 教養課程 教授 石井元章

ナポリ出身の人文主義者ポンポニオ・ガウリコ (Pomponio Gaurico 1481/82ca. - 1528ca.) がフィレンツェ暦 1504 年 1 月 8 日、すなわち西暦 1503 年 12 月 25 日にフィレンツェの出版業者フィリッポ・ジュンティ社から刊行した『*De Sculptura* (青銅の鑄造術について)』は、青銅彫刻に特化したルネサンス初のラテン語美術論として知られる。近代語への翻訳としては、ブロックハウスによるドイツ語訳(1886)、シャステルとクラインによるフランス語訳(1969)、およびクトロによるイタリア語訳(1999)があるが、報告者は後二者を底本に同書全体の日本語訳を試みた。それに付随する研究過程で明らかとなった献辞の問題と同書の位置づけについて以下に簡単にまとめる。

本書にはガウリコ自身の手になるフェルラーラ公エルコレ・デステ (Ercole d'Este 1431-1505) への献辞に先立って、ロレンツォ・ストロツィ (Lorenzo Strozzi 1482-1549) へのマルカントニオ・プラーチドの献辞が存在する。この献辞の筆者プラーチドに関しては不詳であるが、献呈を受けたストロツィは、現在もフィレンツェの中心部に残る同家の宮殿を建てたフィリッポの息子で、当時 22 歳の若者であった。ロレンツォは、『*De urbe Roma*『都市ローマについて』』を著したベルナルド・ルチェッライの娘ルクレツィアと 1503 年に結婚したばかりであった。本書はロレンツォをスポンサーとして出版されてはいるが、その費用は実質的に義父ルチェッライが負担したと考えられる。そのためフィレンツェ共和国のジュンティ社から、ルチェッライ家のサロンであったオルティ・オリチェッラーリに集ったビンダッチョ・リカーゾリやピエトロ・コリニートらの人文主義者を第一の対象読者として出版され、彼らを通じてイタリア半島全体に著作の評価が広まることを期待されたと考える研究者もいる。しかし、ガウリコ自身がフィレンツェに立ち寄ったことを証明する史料は残されていない。

プラーチドの献辞に次いで、本文の冒頭にガウリコ自身の手になるエルコレ・デステへの献辞がある。ガウリコは、名前の示す通りエルコレ (ヘラクレスのイ

タリア語読み) をゼウスの最も愛した息子ヘラクレスに準え、英雄に勝るとも劣らないと評価する。エルコレは、1471 年から 30 年以上に亘って公爵位にあり、名君と謳われたが、本書出版の翌年に没した。エルコレ統治下のフェルラーラは、父君ボルソの治世も含め、15 世紀後半から 16 世紀初頭にかけて、イタリア半島の数多の宮廷にとって、文化上主導的役割を果たした。したがって、この献辞はガウリコが自著をフェルラーラ宮廷の優れた文化環境に結びつけようとした証と言える。

しかし、そうだとすれば、何故エルコレ統治下にあるフェルラーラで彼をスポンサーとして出版しなかったのかという疑問が残る。本書は 1502 年の秋口にパドヴァのガウリコ宅書斎を舞台として展開し、ガウリコ以外の主な登場人物ふたりもパドヴァに関連の深い人物である。したがって、パドヴァかヴェネツィアの著名な出版業者アルド・マヌツィオの許で刊行することもできたはずである。それが、何らかの理由でプラーチドへと書物が渡り、フィレンツェで出版されることになった。しかも、その時にもともとガウリコ自身の書いたエルコレへの献辞は残され、プラーチドによるストロツィへのそれが付加されたのだが、その理由も不明である。

ガウリコの執筆活動において今回訳出した『青銅の鑄造術について』は、特異な作品である。彼はもともとギリシア語・ラテン語文献を研究する所謂人文主義者であり、エレジー (哀歌) などの詩を発表していた。言ってみれば、研究者・文学者が余暇に作った青銅像の鑄造について、専門である古典文学の知識をちりばめながら完成したのが『青銅の鑄造術について』であると言える。それをガウリコは弱冠 20 歳で著した。その意味で、彼の芸術に対する感性が成熟の域に達していたとは言い難い。しかし、それだけに若いガウリコが大いなる野心を以て本書を世に出したことは疑いを入れない (詳しくは『藝術文化研究』25 号 pp.1-20 掲載の拙稿を参照されたい)。